様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２２８９

研究課題名（和文）『竹取物語』注釈の最新化のための研究

研究課題名（英文）The Study for Updating the Annotations of Taketori Monogatari

研究代表者
久保　堅一（KUBO, Kenichi）

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：３０６２４０８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世以来の『竹取物語』注釈を無批判的に継承することなく、それらを丁寧に吟味し、その上で、漢訳仏典も含めた多様な漢籍を駆使しながら、『竹取物語』の表現、モチーフ等の典拠や背景を新たに探ってゆくものである。
初年度（2018年度）は、大伴大納言の求婚譚において登場する「鳶・烏」に着目し、その背景や効果を考察した。ほかに、後世の歴史物語『栄花物語』における『竹取物語』受容についても指摘した。
最終年度（2019年度）では、石作の皇子に課された難題〝仏の御石の鉢〟について、いかなる典籍や知識がこれまで注に挙げられ継承されてきたのかを確認し、改めてその材源について調査を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
初年度の成果である大納言求婚譚の「鳶・烏」については、その登場が求婚譚のオチとして機能している効果について明らかにし、作品の注釈を充実させた。また、『栄花物語』における『竹取物語』受容については、11世紀前半には現存の『竹取物語』本文が存在したことを確認できた。
最終年度、石作の皇子に課された〝仏の御石の鉢〟については、その背後に仏伝（釈尊伝）に描かれる四天王奉鉢の伝説が存在していたことを指摘した。
上記の研究のなかで、従来の注釈の総括や材源の新たな指摘などをおこなうことができた。『竹取物語』の注釈の最新化を図り、学界への寄与ができたものと考える。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to update the annotations of Taketori Monogatari by investigating the sources and backgrounds of the expressions and motifs in it.
In the first year, I examined the backgrounds and effects of “the eagle and the crow” in Dainagon’s courtship story. In addition, I pointed out how Taketori Monogatari affected the later work Eiga Monogatari.
In the final year, I revisited the conventional annotations about the Buddha’s Stone Bowl and reconsidered the sources.

研究分野：平安文学

キーワード：『竹取物語』　注釈　漢詩文　漢訳仏典　典拠　材源

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『竹取物語』には、分厚い研究史がそなわっている。研究論文はもちろんのこと、専門的な研究書も数多く刊行されてきた。この物語が現存最古の物語文学であり、『源氏物語』をはじめ後続する文学作品に多大な影響を及ぼした作品ゆえであろう。

だからこそというべきか、近年の『竹取物語』研究は、上坂信男『竹取物語全評釈　本文評釈篇』（右文書院、1999 年）や奥津春雄『竹取物語の研究―達成と変容―』（翰林書房、2000 年）で一つの総括や達成が提示されて以降、写本や享受に関する研究を除いて、ここ１０年以上も停滞しているといえる。

以上のような研究状況においては、すでに確定した典拠や材源に対して、特に批判を加えたり他の典拠を捜索したりすることなくそれを継承してしまうという傾向が見受けられる。これは、『竹取物語』が優秀な先行研究を誇るがゆえの問題であろう。現行の注釈は、そのほとんどが、江戸時代の小山儀・入江昌喜『竹取物語抄』や田中大秀『竹取翁物語解』で示された典拠や材源に従っているといえる。もちろん、現在に継承されている注釈は優れたものである。だが、それらを丁寧に吟味し、新たな典拠の可能性を博捜することは研究の推進のためには何としても必要な作業であろう。

本研究の代表者（久保）は、本研究に先立つ研究において、『竹取物語』が一面的で単純な知識で成り立っているのではなく、複数の思想や知識が常に重なり合い、融合している豊穣な世界を持っている、ということを明らかにしてきた。『竹取物語』は典拠も多層的、複合的に踏まえられている。そのような豊かで複雑な物語世界の特質を解明してゆくためにも、停滞を乗り越えて注釈を更新し、研究を前進させるべきであろう。

本研究は以上のような背景のもと開始されたものである。

２．研究の目的

本研究は、『竹取物語』の現行の注釈を点検し、その適否を見定め、さらに新たな典拠・材源を発見することを目的とした。すなわち、『竹取物語』の注釈の最新化を目指したものである。

さらに、上記の目的を遂行するなかで、『竹取物語』の〈知〉の基盤を闡明することを重要な課題とした。『竹取物語』は２つの大きな思想―仏教思想と神仙思想―を基盤としており、それら両思想が混交、融合しながら物語世界を支えているのだが、従来の注釈はそうした複合的な視点を確保しているとはいいがたいからである。

以上の目的を達成することで、『竹取物語』の研究水準の向上をはかり、学界への寄与を企図した。

３．研究の方法

研究の方法としては、全篇にわたって語や表現、モチーフ等の典拠や背景を探り、詳細な注を施すというスタイルを取った。

具体的には、以下の３点の作業をおこなった。

(1) 近世から現代に至るまでの注釈を調査し、これまでの諸説を整理する。
(2) 語や表現等については、これまで等閑視されてきた部分に特に細心の注意を払い、いわゆる古辞書や、旧鈔本に付された和訓を活用しながら調査する。
(3) 物語内の具体的な設定、モチーフ等については、漢詩文の世界と漢訳仏典の世界をまたいで調査をおこない、それぞれの表現世界における類型やイメージを把握する。

具体的な文献としては、(1)では、上坂信男『竹取物語全評釈　古注釈篇』（右文書院、2000 年）が挙げられる。当該書を用いて諸説の概要をつかんだのち、個々の注釈書を調査していった。(2)では、『新撰字鏡』や『類聚名義抄』等の古辞書、『白氏文集』等の旧鈔本（金沢文庫本など）を用いた。(3)の作業をおこなうに際しては、『芸文類聚』『初学記』『白氏六帖』等の類書のほか、「大正新脩大蔵経テキストデータベース」を積極的に活用した。

４．研究成果

本研究課題の主な成果としては、まず、大伴大納言の求婚譚において最後に登場する「鳶・烏」についてその背景や効果を考察し、論文「トビとカラス―『竹取物語』大納言求婚譚の一背景―」（『地域学論集　鳥取大学地域学部紀要』第 15 巻第 2 号,2019 年 3 月）として発表したことが挙げられる。この二種の鳥の組み合わせは漢籍の表現世界を背景に持っており、そこでは獰猛で貪欲な鳥としてのイメージが付与されている。本論文は、このイメージが大納言への皮肉となることで、二種の鳥は求婚譚のオチとして機能していることを明らかにした。大納言求婚譚の「鳶・烏」は、従来の注釈ではほとんど言及されてこなかった部分であるため、この研究は注釈の充実に寄与するものとなった。また、こうした細部の表現においても漢籍の教養が認められることは、この物語が極めて高度な文献上の知識のうえに成立していることを示すものであり、本研究によって、『竹取物語』の〈知〉の基盤の一端を闡明することができたものと考える。

次の成果としては、「『竹取物語』〝仏の御石の鉢〟小考」（『地域学論集　鳥取大学地域学部紀要』第 16 巻第 3 号,2020 年 3 月）がある。本論文は、石作の皇子に課される難題物〝仏の御石の鉢〟に関して、いかなる典籍や知識がこれまで注に挙げられ継承されてきたのかを確認し、改めてその材源について調査を試みたものである。具体的には、この難題に関するこれまでの主な注釈を掲出し、それらが基本的に近世の注釈を踏襲していることを批判的に吟味するとともに、

〝仏の御石の鉢〟の背後に仏伝（釈尊伝）に描かれる四天王奉鉢のエピソードが存在していたことを指摘した。この研究によって、近世から現在に至るまでの〝仏の御石の鉢〟についての注釈を点検し得たと同時に、四天王奉鉢のエピソードという材源を挙げたことで、従来の注釈を更新することができた。また、上記に加えて、本論文では、石作の皇子の求婚譚に仏伝が受容されていたことから、この求婚譚が、同じく仏伝を受容している『竹取物語』の枠組みと同時に創造された可能性についても考察した。このことは『竹取物語』の成立論への視座を提供するものであり、本研究のひらいた展望として位置づけられる。

ほかに、直接『竹取物語』を対象としたものではないが、後世の歴史物語『栄花物語』における『竹取物語』受容についても考察し、論文「二人のかぐや姫　『栄花物語』巻第六「かかやく藤壺」の彰子と定子」（高橋亨・辻和良編『栄花物語　歴史からの奪還』森話社、2018 年）として発表した。これは『栄花物語』巻第六に描かれる一条天皇の２人のキサキ、彰子と定子の姿にかぐや姫が受容されていることを論じた研究である。この研究において重視したい知見として、一条天皇の「七十の翁」という発話に、竹取の翁の「年七十にあまりぬ」という発話が受容されていたことが挙げられる。竹取の翁の年齢は、物語後半では「五十ばかり」とも記されており、はやくから「七十にあまりぬ」との矛盾が指摘されてきた。本研究によってその矛盾が解消されたわけではないが、少なくとも『栄花物語』（正篇）が執筆されたと目される 11 世紀前半には「七十にあまりぬ」という『竹取物語』本文が存在したことが考えられる。古写本に恵まれているとはいいがたい『竹取物語』においては、当該部分に注を付すに値する知見といえるだろう。

以上記してきたように、上記の２年間にわたる研究のなかで、従来の注釈では取りこぼされてきた細部への目配りや、部分的ではあるがこれまでに継承されてきた注釈の総括、また、新たな材源の指摘などを実行することができた。『竹取物語』の注釈の更新をおこない、学界への寄与ができたものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 久保堅一	４．巻 15(2)
２．論文標題 トビとカラス―『竹取物語』大納言求婚譚の一背景―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地域学論集 ： 鳥取大学地域学部紀要	６．最初と最後の頁 108-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 久保堅一	４．巻 16(3)
２．論文標題 『竹取物語』〝仏の御石の鉢〟小考	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地域学論集 ： 鳥取大学地域学部紀要	６．最初と最後の頁 103-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 高橋 亨、辻 和良、桜井 宏徳、高橋 照美、吉海 直人、土居 奈生子、村口 進介、星山 健、久保 堅一、山下 太郎、廣田 收、神田 龍身	４．発行年 2018年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 271
３．書名 栄花物語　歴史からの奪還（高橋亨・辻和良編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考